

ペスタロッチー教育賞 受賞者紹介

NPO 法人 食べて語ろう会 理事長

なか もと ちか こ
中 本 忠 子 氏

1934年、広島・江田島に生まれる。三人の子をもつ母親として、貧困や虐待などさまざまな理由から居場所がないと感じている子どもたちの「ばっちゃん」として広島市で暮らす。

中本氏が保護観察処分となった少年の更生を助けるために面接指導等を行う、法務省所管の非常勤職員である「保護司」になったのは、46歳の時であった。当時、中学校のPTA 役員であった中本氏は、忙しい保護者に代わって警察に補導された生徒らを迎えに行っていた。その縁で「保護司」への誘いを受け、1980年から「保護司」としての活動を開始した。1998年からは中地区保護司会理事、2000年から2008年まで同会副会長を務める。また1982年から現在に至るまで更生保護女性会会員として活動し、2002年から2009年までは中地区更生保護女性会会長を務めた。

「保護司」として活動していた中本氏は、1982年、一人の中学生との出会いから、中本氏が理事長を務めるNPO 法人「食べて語ろう会」の設立へと至ることになる「食事の提供」を開始する。その少年はシンナーを買いお金欲しさに空き巣に入り、少年院に送られた少年であった。シンナーをやめられない理由として少年が語った「腹が減ったのを忘れられるから」という言葉に衝撃を受けた中本氏は、空腹に気がつけなかったことを詫言、その日から少年に手料理を振る舞った。その少年はシンナーをやめると同時に、同じような境遇にいる友人を中本氏の自宅に連れてくるようになり、多くの「行き場のない子ども」が中本氏の自宅に集まるようになった。

こうして近所の方の助けを借りながら、他からの援助等を受けずに自宅を開放して子どもたちに食事を提供する活動がスタートする。25年ほど前から、自宅だけではなく、地域住民と「居場所のない」子どもたちを引き合わせることを目的に、公民館でも食事会を開いている。この食事会では子どもたちもみんな準備を手伝うことで、疎外感を持ちがちな子どもたちを地域の中で受けとめる場を創出している。2003年以降、この食事会を「食べて語ろう会」と名付け、月二回、定期的

に開催してきた。2015年8月には、「食べて語ろう会」が今後も継続的に活動し続けていけるようにとの願いから、NPO 法人「食べて語ろう会」を立ち上げた。

中本氏の活動を記録した書籍も出版されている。その一つ、中本忠子、食べて語ろう会『ちゃんと食べとる?』（小鳥書房、2017年）には、「ばっちゃん」の言葉と豊かなレシピ、そして「信じることから始まる」と述べる中本氏と子どもたちがつくり出すぬくもりに溢れた多数の写真が収められている。

中本氏の自宅には現在でも子どもや若者が1日10人から20人ほど訪れ、食卓を囲む。彼らは「ばっちゃん」に見守られ、立ち直るきっかけを得て巣立っていく。昨今、子どもの貧困が問題とされ、食と居場所を提供する「子ども食堂」の存在が注目されているが、中本氏の自宅ではこれが30年以上も繰り返されている。子どもたちが非行や犯罪に手を染める理由を「本人の性格」に帰してしまうのではなく、その子どもが置かれている状況から理解し、解決のために「できること」を実践されたその活動は、まさに先駆的であり、かつ非常に重要なものである。「食事の提供」は誰でも「できること」であるが、本当に実践する人はごく稀である。今日のように「子ども食堂」開設が行政によって後押しされ、開設方法のセミナーが開かれていても、なおそうであることを考えると、当初は外からの支援が期待できない中で開始した中本氏の活動は、類稀な極めて貴重なものであるといえよう。

こうした中本氏の長年の活動は、すでに多くの機関・組織によって表彰されている。具体的には広島保護観察所長表彰（1986年）、中国更生保護委員会委員長表彰（1990年）、法務大臣表彰（2001年）、瑞宝双光章受賞（2006年）、法務省保護局長特別感謝状受賞（2014年）、公益財団法人「社会貢献支援財団」社会貢献者表彰（2015年）等、数々の表彰を受けている。また最近では、2016年に広島市民賞を、今年の4月には吉川英治文化賞を受賞した。

18世紀スイスの思想家であり実践家であったペスタロッチーは、貧困や保護者の不在など、適切な養育を受けられない子どもたちが家庭的な雰囲気の中で育つことで、困難を乗り越えていく力を身につけることができると確信していた。子どもたちの食に着目しながら子どもたち自身の自立とつながりを組織的に支える中本氏の実践はこのペスタロッチーの理念を実現するものといえる。氏の長年の努力と功績に対し、第26回ペスタロッチー教育賞を贈呈し、心からの敬意を表すと共に高く顕彰したい。